

興福寺境内の調査

— 第567次

1 はじめに

興福寺では、1975年から76年にかけて、南大門の周辺で防災施設工事にともなう発掘調査をおこない（以下、旧調査と記す）、南大門の南東と南西で、それぞれ壇正積基壇をとまなう建物を検出している¹⁾。

南大門の南東では、建物西側部分の基壇外装（凝灰岩製の延石）と建物を囲繞する石敷を検出し、西側南辺の基壇中央には凸部があること、東側では基壇が南へ鍵状に曲がることを確認されている。一方、南大門の南西では、建物北部の基壇外装（凝灰岩製の延石と地覆石）と基壇周囲の石敷（雨落溝）を検出している。これらの建物遺構は、位置および平面形態から、『興福寺流記』所引の「天平記」に見える「門守屋」「曲殿」に比定されている（以下、東門守屋・西門守屋と呼ぶ）。

今回の調査は、防災施設の建設にともなうもので、調査地は、西門守屋跡にあたる。調査区は、旧調査のトレンチと重複する位置に東西12m、南北10mで設定し、後に西南隅を東西8m、南北3m分拡張した。調査面積は、計144㎡である。調査は2016年5月25日より開始し、同年7月20日に終了した。

2 基本層序

基本層序は、上から表土（5cm）、整備盛土（45～65cm）、旧表土（5cm）、現代盛土（3cm前後）、にぶい黄褐色砂質土（5～20cm、近代以降の遺物包含層）、橙色粘質土もしくは淡黄色粘質土（20～30cm、創建期の整地土か）、黄褐色砂礫（地山）である。地山の標高は、調査区東北部では約93.6m、西南部では約92.9mで、おおよそ北東から南西に向かって低くなる。旧調査のトレンチは現代盛土直下で検出したが、旧表土直下で、旧調査終了時に撒かれた遺構の保護砂や、石敷の上面を確認した場所もある。遺構検出は、基壇外装・雨落溝などが遺存する箇所を除き、基本的に橙色粘質土もしくは淡黄色粘質土の上面でおこなった。遺構検出面の標高は、調査区北部のもっとも高い箇所で93.8m前後、調査区南部のもっとも低い箇所で93.3m前後である。

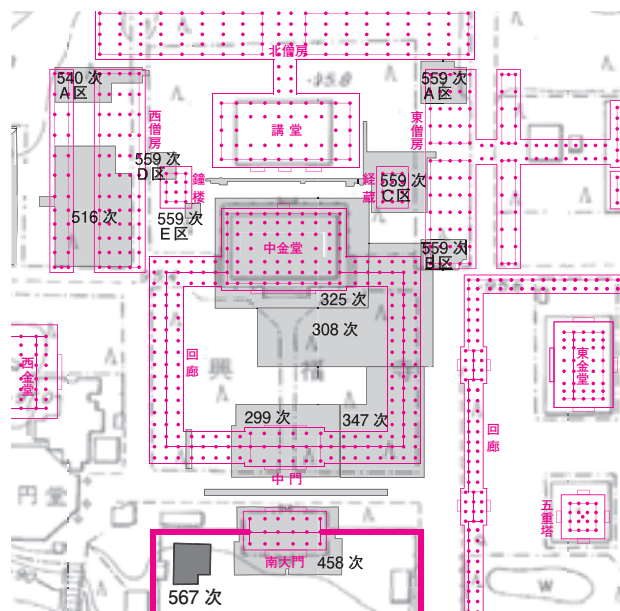


図270 第567次調査区位置図 1:2500

3 検出遺構

主な検出遺構は、基壇建物1棟、およびその周囲をめぐる石組溝4条、土坑5基などである。

基壇建物SB11150（西門守屋） 遺構として検出したのは、基壇外装とその抜取溝である。柱位置の痕跡は、後世の削平・攪乱が著しく、確認することができなかった。調査区北部では、旧調査で確認していた地覆石・延石を再検出し（図274）、調査区東南部では、部分的ながら、新たに基壇の東側から南側にかけての延石とその抜取溝を検出した（図275）。その結果、西門守屋は基壇が西側で南に折れ、東側では南辺に階段とみられる凸部をもつなど、東門守屋と南大門をはさんでほぼ対称の平面形態であることが判明した。なお、西側の基壇南端を確認するため、調査区を南に拡張したが、攪乱により確認できなかった。また、複数箇所土層断面を観察したが、掘込地業や版築は認められなかった。

基壇の規模は、東西約9.7m、南北8.2m以上。東側の東西棟部分は、東西・南北ともに約4.9mで、南辺中央の凸部の幅は約3.7m、南側の南北棟部分は、東西約4.7mと推定され、東西棟部分よりやや狭い。東門守屋の基壇規模は、西側の東西棟部分が南北5.04m、東西4.7m、南辺中央の凸部の幅3.04mとされており²⁾、今回の調査で得られた西門守屋の規模とはやや異なる。

残存する基壇外装は、いずれも二上山産の凝灰岩を用

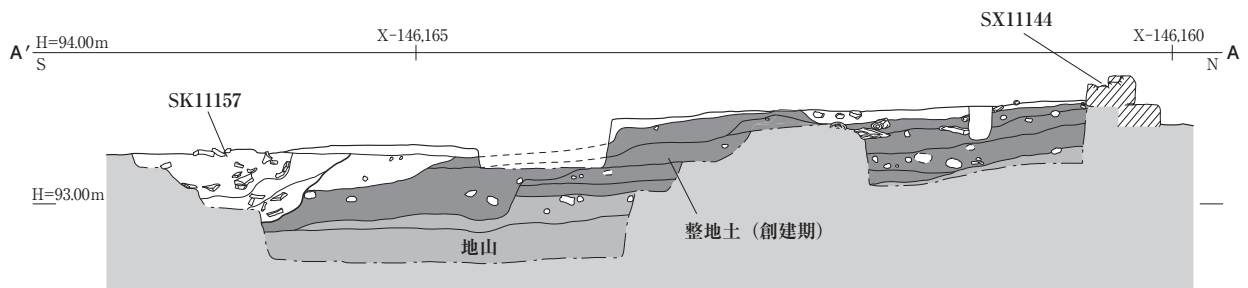


図271 第567次調査南北土層図 1 : 50

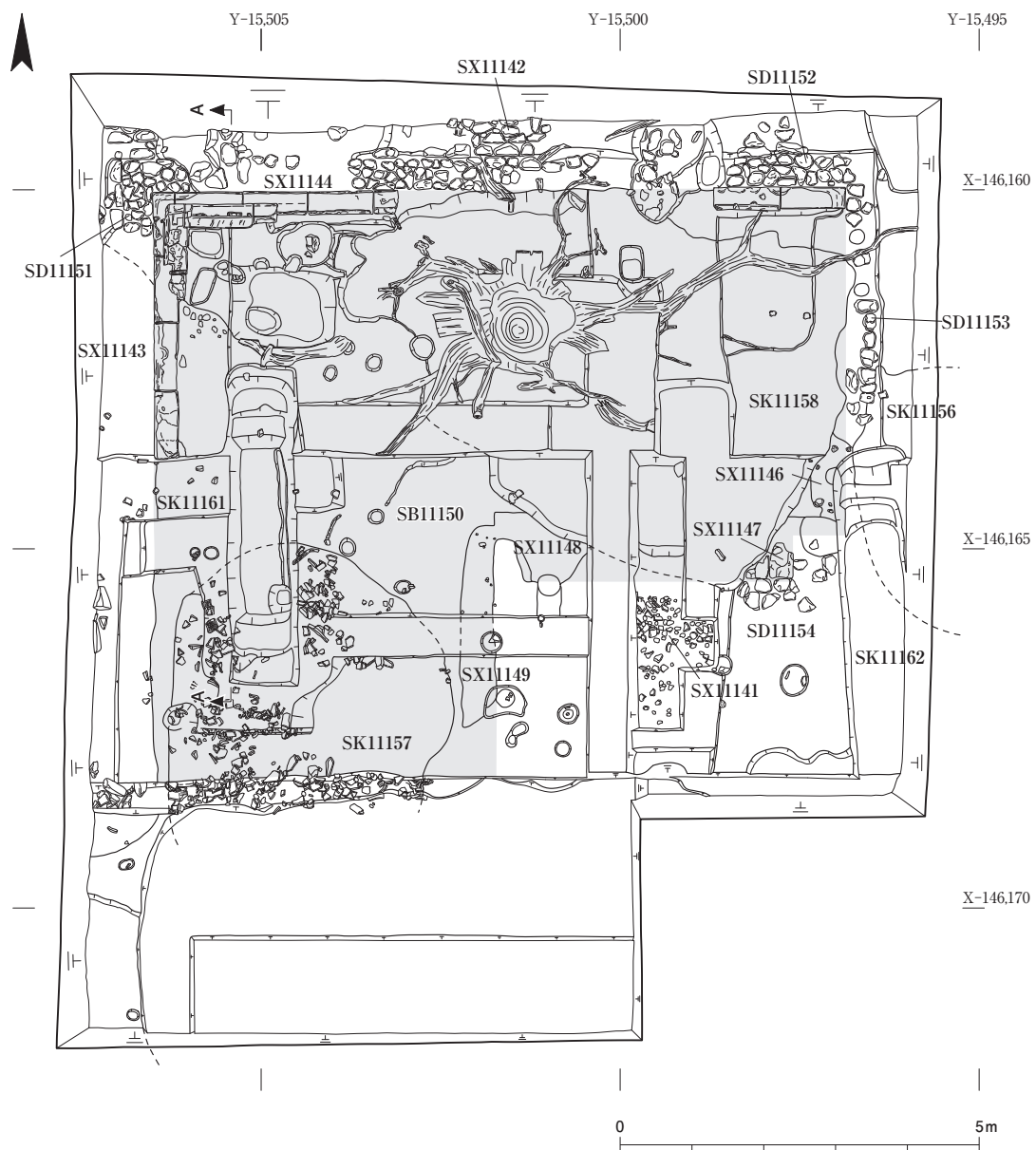


図272 第567次調査遺構図 1 : 100

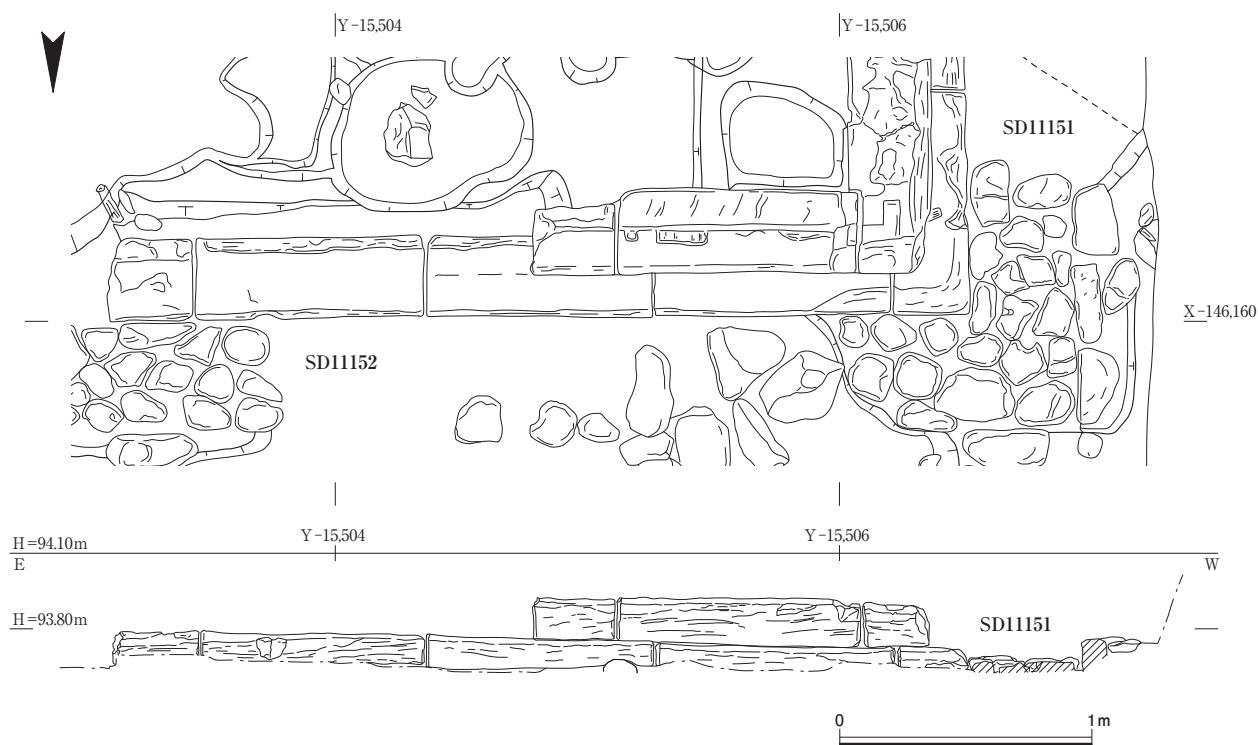


図273 SX11144西端遺構図 1:30

いていることから、創建当初（奈良時代前半）のものである可能性が高い。ただし、裏込土は明瞭に確認できず、据え直しの有無は判断できなかった。

基壇外装SX11143 SB11150西面の基壇外装。基壇西北隅から南に約3.6m分、延石4石と地覆石2石を検出した。以南は残存しないが、後述の土坑SK11157の西縁が直線状を呈しているのは延石に規制されたためと考えられ、少なくとも土坑SK11157の南端まで、約8.2m延びていた可能性が高い。

基壇外装SX11144 SB11150北面の基壇外装。東西両端を検出した。西は基壇西北隅から東に約3.4m分（延石4石・地覆石2石）、東は基壇東北隅から西に約1.8m分（延石2石）が残存する。中央部は、主に後述の大土坑



図274 SB11150西北隅の基壇外装と雨落溝（北西から）

SK11158によって大きく壊されている。

西面・北面の地覆石・延石のうち完存するものは、幅約33cm、長さ約89cmもしくは約93cm。高さは、延石が最大15cm、地覆石が最大20cm。延石の一部は、上面の基壇側を幅約6cm、深さ約2cm切り欠き、地覆石を受ける仕口を設ける。地覆石は、同じく基壇側を幅約15cm、深さ約5cm切り欠いて羽目石の仕口とし、さらに東石を受けるための仕口を設けている。

基壇外装抜取溝SX11146 調査区東南部で、幅約0.5m、長さ約1.2m分を検出した。深さは約3cm。埋土に凝灰岩片を多く含む。SX11144東端の南延長上に位置し、SB11150東面延石の抜取痕跡と考えられる。

基壇外装SX11147 調査区東南部、SX11146の南西で、L字形に並ぶ延石2石を検出した。東西約0.6m、南北約0.5mで、北と西は大土坑SK11158に壊される。SB11150南面凸部（階段か）の東南隅にあたりと考えられる。

基壇外装抜取溝SX11148 調査区中央部、SX11147の西方で検出した。東西約1.3m、南北約1.0m。SB11150南面凸部西端の延石抜取痕跡と考えられる。

基壇外装抜取溝SX11149 調査区中央から南にかけて検出した、南北方向の溝状の遺構。長さ約2.8m、幅約0.5m、深さ約5cm。埋土に凝灰岩片を多く含む。SB11150南半（南北棟部分）東面の延石抜取痕跡と考えられる。

石組溝SD11151 基壇外装SX11143の西に接して検出

した乱石組の溝。幅約45cm、深さ約15cmで、基壇西北隅から南に長さ約1.1m分を検出した。SB11150の西雨落溝と考えられる。

石組溝SD11152 基壇外装SX11144の北に接して検出した乱石組の溝。幅約45cm、深さ約15cmで、基壇西北隅から東へ、断続的ながら長さ約10.2m分を検出した。SB11150の北雨落溝と考えられる。

石組溝SD11151・SD11152は、いずれも側石を内側（基壇側）には設けず外側にのみ設け、長径35cmの前後の細長い自然石を用いる。底石は、長径約10～25cmの玉石を2～3列敷き詰める。SD11152では東端に近いY-15.497.5付近を境に、西では底石が概ね3列、東では2列となり、工程差あるいは改修などの時期差を反映している可能性がある。

石組溝SD11153 調査区東部で検出した南北方向の石列。長さ約5.7m、幅約0.4m。北端が基壇東北隅の延石の東に接することから、SB11150の東雨落溝の底石と考えられる。石は1～2列で、北雨落溝SD11152の東部と共通するか。側石やその抜取痕跡は検出できなかった。南端から約1.6mは、後述の土坑SK11156と重複し、それより新しい。SK11156からは平安時代の軒丸瓦(図278-3)が出土しており、少なくとも重複部分の溝は、平安時代以降の改修を受けていると考えられる。

石組溝SD11154 基壇外装SX11147の南東に隣接する石列。東西約1.3m、南北約0.8mの範囲で検出した。SB11150南面凸部東南隅の雨落溝の底石と考えられる（東端の1石は側石の可能性もある）。

石敷SX11142 北雨落溝SD11152の北で検出した石敷。



図275 SB11150東南隅の基壇外装と雨落溝（南東から）

SD11152の側石とほぼ同じ高さに、長径25～35cmの自然石を敷く。検出範囲が狭いため判然としないが、旧調査で検出された、西門守屋の北雨落溝と南大門の西に取り付く築地塀の南雨落溝との間に敷かれた石敷にあたりとみられる。

土坑SK11156 調査区東端で検出した不整形の土坑。南北約3.6m、東西0.8m以上で、さらに調査区の東に延びる。深さは約0.55m。炭・焼土を多く含み、平安時代の軒丸瓦(図278-3)が出土している。石組溝SD11153と重複し、それより古い。

瓦溜SX11141 調査区東南部の断割調査で検出した。南北約1.8m、東西1.0m以上の範囲に広がる。深さは約0.15m。地山直上にあり、淡黄色粘質土に覆われる。軒丸瓦は出土していないが、丸・平瓦の特徴から奈良時代のもものと推定される。

土坑SK11157 調査区西南部で検出した不整形の土坑。東西約4.0m、南北3.7m以上、深さ0.8m以上。埋土に多量の瓦を含む。焼土や炭も多く含み、火災の後片付けにともなうものか。基壇建物SB11150と重複し、それより新しい。土坑の西の輪郭は直線的で、西面基壇外装SX11143内側の延長上にあたることから、外装が残存している段階で掘削されたと考えられる。

大土坑SK11158 調査区中央から東北部にかけて検出した不整形の土坑。東西約7.2m、南北約5.6m、深さ約0.86m。近世の遺物を含む。基壇建物SB11150と重複し、それより新しい。

長方形土坑SK11161 調査区西部で検出した南北に長い長方形の土坑。長辺約4.5m、短辺約1.0m、深さ約1.0m。短辺は緩やかな傾斜で立ち上がり、斜面を階段状に成形する。基壇建物SB11150と重複し、それより新しい。西室の発掘調査（第516次・第540次調査）において同様の土坑を検出しており、太平洋戦争時の防空壕と考えられている³⁾。

長方形土坑SK11162 調査区東端で検出した南北に長い長方形の土坑。中軸は、北でやや西に振れる。長辺4.8m以上、短辺約1.0m、深さ約1.0m。さらに調査区の南東に延びる。北端は緩やかな傾斜で立ち上がり、斜面を階段状に成形する。基壇建物SB11150と重複し、それより新しい。上述の長方形土坑SK11161と同じく、防空壕の可能性もある。

（桑田訓也）

4 出土遺物

土器・土製品 調査区から整理用コンテナ6箱分の土器・土製品が出土した。近世から現代にいたる陶器類が大半で、古代・中世にさかのぼる土器・土製品は少ない。

図276の1・2は土坑SK11157出土の土師器皿。1はいわゆるての字状口縁を呈し、器壁がやや厚い。口径10.8cm。2は口縁部が緩やかに立ち上がり端部のみを外反させる。口径15.2cm。これらは11世紀後半から12世紀初頭に位置づけられる。

3は近世の包含層から出土した扁平形泥塔。宝塔軸部が欠損し相輪部分のみが残る。板状を呈し、表面に宝塔

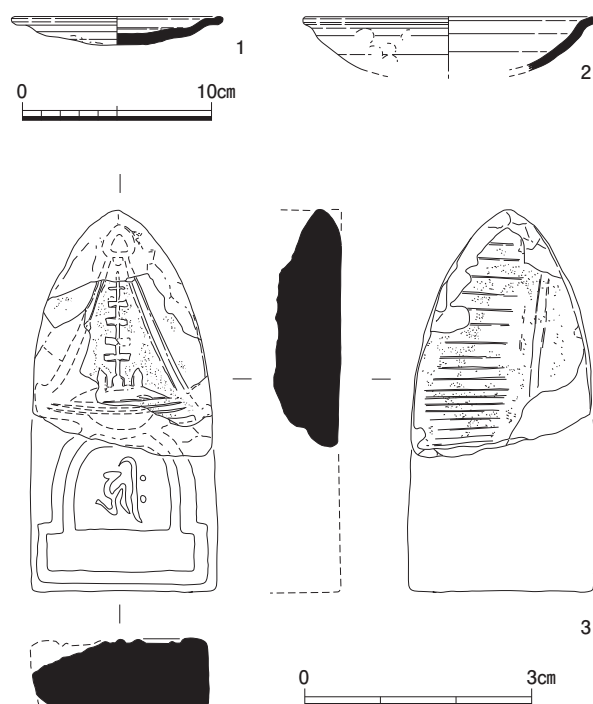


図276 第567次調査出土土器・土製品 1：4（3は1：1）



図277 第567次調査出土泥塔

を型押しする。裏面には木目らしき凹凸が残る。焼成は良好で色調は褐色を呈する。表面と裏面に金雲母が付着し、同じ範囲が赤褐色を呈する。金雲母は側面や胎土には見られず、成形時以降の工程で付着したものである。型の離れ砂もしくは塗布されていた可能性がある。

この泥塔は舟形光背宝塔型Ⅰ類に分類され、三重県伊賀盆地から奈良県を中心に分布する⁴⁾。ただし、複数の型が存在するようであり、宝塔のみを陽刻し縁辺部が平坦になる型に対し、本例は宝塔の縁辺部が堤状を呈する点の特徴である。本例は明日香村橘寺出土と伝わる資料⁵⁾にもっとも近い。また、扁平形泥塔は、一地点から大量に出土する遺跡と少数出土する遺跡があり⁶⁾、本例は後者に位置づけられる。量産された泥塔が二次的に移動した行き先の一つとして興福寺境内が加わったものと評価できる。

（小田裕樹）

瓦磚類 本調査区から出土した瓦磚類を表44に示す。古代から近世までの瓦磚類が確認できるが、軒瓦では平安時代のもものが比較的多い。図278の1～4は軒丸瓦。そのうち、1～3が平安時代のものである。1は本調査

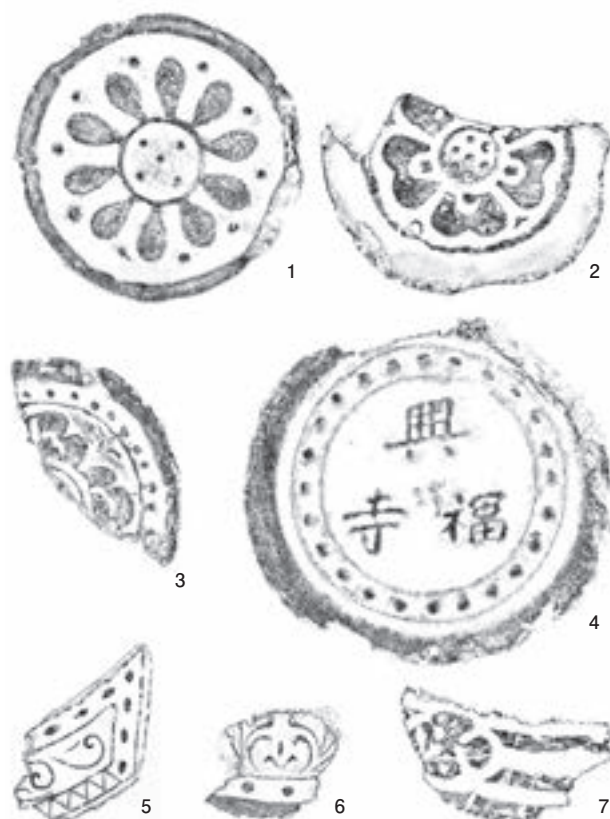


図278 第567次調査出土軒瓦 1：4

表44 第567次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
巴（鎌倉）	7	6671	A	1	丸瓦（中世・刻印）	2		
（中世）	7		?	1	（近世・刻印）	5		
（近世）	3	6733	H	1	（近世・ヘラ書釘穴）	1		
興105	16	興654		3	平瓦（中世・刻印）	1		
興240A	1	興666		1	（中世・分割線）	1		
古代	3	平安		13	（近世・刻印）	11		
平安	8	鎌倉		4	（近代・刻印）	5		
鎌倉	4	室町		3	鬼瓦Ⅲ	1		
中世	8	中世		1	鬘斗瓦（近世）	12		
近世	1	近世		7	伏間瓦	8		
型式不明(奈良)	4	（刻印）		1	（近世・刻印）	1		
時代不明	2	型式不明(奈良)		2	目板瓦	1		
					輪違い	1		
					留蓋	1		
					掛平瓦	1		
					用途不明道具瓦	3		
軒丸瓦計		64	軒平瓦計		38	その他計		55
丸瓦			平瓦			磚	凝灰岩	レンガ
重量	338.813kg		939.402kg		0.088kg		16.071kg	4.009kg
点数	2753		9404		1		67	5

区から16点も出土しており、西門守屋との強い関連性を窺わせる。2は類例が少ないが、3は旧境内各所から出土しており、SK11156からも出土している。4は鎌倉時代の興福寺銘軒丸瓦。5～7は軒平瓦で、5は興福寺創建瓦である6641A。6は6733Hであり、元興寺所用瓦と推定されている。7は平安時代のものであり、西室でも出土している。

（林 正憲）

銭 貨 近世以降の遺物包含層から、複数枚の銅銭が鏝着した状態で出土した。CT撮影の結果、銭種はすべて寛永通宝で、最大21枚が鏝着し、ほかに5枚鏝着したものが2つある。紐の断片が残存するものがあり、差し銭と考えられる。ほぼ同位置から17枚の寛永通宝が出土しており、一連の差し銭の可能性がある。

金属製品 表土および近代以降の土坑から鉄角釘と鉄丸釘がそれぞれ5点出土した。鉄角釘はいずれも身部の断片で頭部を残さない。

石製品 表土から石製の長方硯1点が出土した。

（芝康次郎）

5 ま と め

西門守屋の平面形態 今回の調査では、旧調査で確認

していた建物北部の基壇外装に加え、新たに建物東南部の基壇外装と、その抜取溝を検出した。その結果、西門守屋は基壇が西側で南に折れ、東側では南辺に階段とみられる凸部をもつなど、東門守屋とほぼ対称の平面形態であることが判明した。ただし、規模には若干の差異があり、今後の検討課題である。

基壇の南北規模や建物の柱配置については、後世の削平・攪乱が著しく、あきらかにすることができなかった。**西門守屋の創建・廃絶時期** 創建時期については、残存する基壇外装の所見から、奈良時代前半にさかのぼる可能性が高い。これは、「門守屋」「曲殿」が『興福寺流記』所引「天平記」に見えることとも整合的である。

廃絶時期については判然としないが、建物の西南部と重複する土坑SK11157出土土器の年代観を重視すれば、11世紀後半から12世紀初頭頃が1つの有力な候補となり得る。

その場合、注目されるのは、嘉保3年（＝永長元年、1096）の火災である。中金堂をはじめ回廊・中門・南大門・講堂・鐘楼・経蔵・三面僧房など伽藍中枢部が焼亡した。西門守屋のことは史料に見えないが、その立地からみて、至近にある南大門と運命を共にした可能性は高い。このときの再建は難航し、南大門は承徳2年（1098）7月に上棟されたものの、翌年正月に地震のため倒壊した。その後造営を再開するも康和4年（1102）12月にはなお未完成で、翌康和5年（1103）7月によりやく落慶供養が行われている。このような状況下において、西門守屋の再建が断念・放棄された可能性は十分考えられよう。

いずれにせよ、今回の調査で西門守屋の廃絶時期に一定の見通しが得られたことは、大きな成果といえる。

（桑田）

註

- 1) 興福寺『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』、1978。
- 2) 註1) 文献に同じ。
- 3) 興福寺『第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅶ』、2016、17頁。
- 4) 小原雄也「2. 泥塔の位置づけ」『野添大辻遺跡（第3次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2016。
- 5) 石村喜英「瓦塔と泥塔」『新版考古学講座』第8巻、1971、雄山閣、巻頭図版第10図の6。
- 6) 畑大介「扁平形泥塔について」『山梨考古学論集Ⅱ』、山梨県考古学協会、1989。